

指導資料

鹿児島県総合教育センター

特別支援教育 第163号

—小, 中, 特別支援学校対象—
平成23年10月発行

知的障害のある児童生徒が主体的に活動する授業の工夫 —みんなが参加できる授業を目指して—

知的障害がある児童生徒が在籍する特別支援学校や特別支援学級では、個々の実態に応じた指導の充実を図るために、児童生徒が主体的に活動する授業の工夫が求められている。

そこで本稿では、A特別支援学校(以下、A校と示す。)の実践を参考に、児童生徒が主体的に参加できるようにするための授業の工夫について述べる。

1 VTRを活用した授業分析

A校では、全学級が各教科等を合わせた指導として、日常生活の指導「朝の会」の授業に取り組んでいる。

「朝の会」では、児童生徒が一日の流れに見通しをもって過ごすことができるように、スケジュールを確認したり、歌遊びなどの活動を取り入れたりすることで、一日の学習への意欲を高める工夫を行っている。

このような「朝の会」の工夫は、多くの特別支援学校や特別支援学級においても実践されているところではある。A校では、児童生徒を主体的に活動させるために、教師がどのような工夫を行っているか、「朝の会」の様子をビデオカメラで撮影し、客観的に授業を見直すことにした。

なお、短時間で継続的な授業分析ができるように、時間と場面を限定して授業分析

を行うようにした。

具体的には、全学級で取り組んでいる「朝の会」の様子を10分間撮影し、児童生徒の活動量と、教師の動き

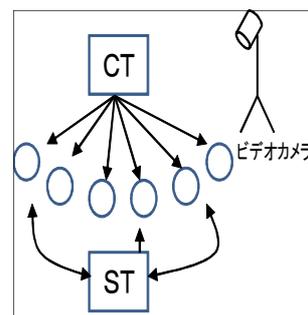


図1 VTRによる分析

について分析を行った。

ビデオカメラは、教室全体を撮影できるように設置し、教師や児童生徒の位置や動線を確認できるようにした。(図1)

※ ティーム・ティーチングでの指導を行っているため、主指導者をチーフ・ティーチャー(CT)、副指導者をサブ・ティーチャー(ST)と表記する。

その結果、CTとSTが児童生徒の近くに行き来することが中心になり、児童生徒は座っている時間や待っている時間が多く、活動量が少ないことが明らかになった。

2 ワークショップ型授業分析

A校では、授業の改善点を集約するためにミーティングを行った。そこでは、参加者全員が気付いたことを付せん紙に記入し、意見を集約する、ワークショップ型の授業分析を行った。

その際、短時間で意見を集約するために、

図2の4象限シートを活用し、児童生徒と教師の活動について「よかったところ」と「気になったところ・疑問点」の該当する欄に付せん紙を貼り、グループごとにまとめ、改善策を話し合った。

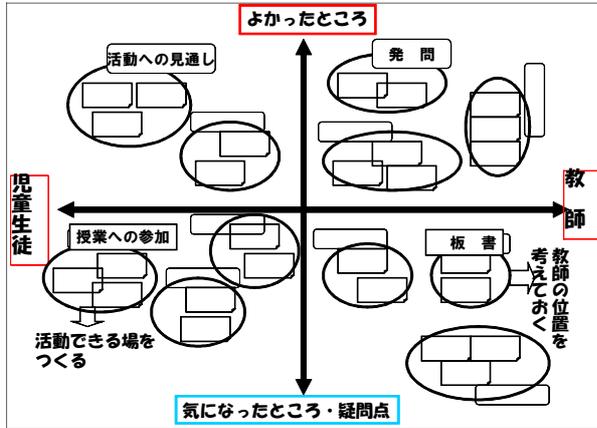


図2 4象限シート

その結果、児童生徒が座って話を聞く時間も大事ではあるが、一人一人の児童生徒の役割や活動を増やすことで、参加する機会を確保する必要があること、教師の立ち位置やチーム・ティーチングの際の役割分担について検討の必要があることなどの改善策が集約された。

ワークショップ型の授業分析は、一人一人が意見を出しやすく、教師自身が主体的に参加できるというよさがある。

また、多様な意見や改善策を集約でき、それらについて、共有化が図られるよさもあることから、各学校においても、授業研究会や校内研修（授業づくり）などにおいて活用することが望まれる。

3 児童生徒が主体的に活動できるようにするための役割分担の変更

A校では、VTRを活用した授業分析やワークショップ型授業分析で明らかになったことを踏まえ、学習活動を見直したり、

役割分担を変更したりすることで、一人一人の児童生徒の参加する機会や、主体的に活動できる場面を増やした。(表1)

その結果、児童生徒の活動量が増え、児童生徒がお互いの活動に、これまで以上に注目する様子が見られた。

表1 朝の会における役割分担(小学部の例)

主な学習活動	改善前	改善後
進行	教師	児童
(1) はじめのあいさつをする。	教師	児童
(2) 朝の歌を歌う。	教師	児童・教師
(3) 朝のあいさつをする。	教師	児童
(4) 日付、天気を発表する。	児童	児童
(5) 健康観察をする。	教師	児童・教師
(6) 今日の予定を発表する。	教師	教師
(7) 終わりのあいさつをする。	教師	児童

4 フォーマーションボードの活用

チーム・ティーチングを実施する際の役割分担の検討においては、図3に示したようなフォーメーションボードの作成と活用が有効である。

これは、児童生徒や教師の動きをミーティングで確認するとき、場の構成を図示したものである。

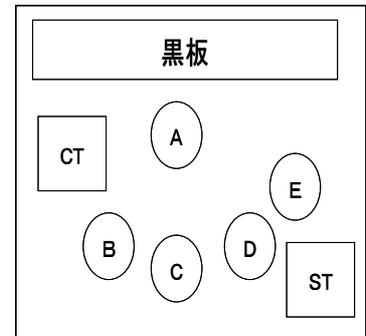


図3 フォーマーションボード

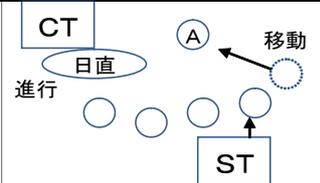
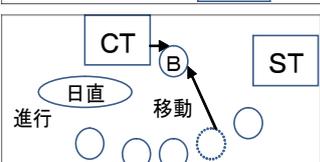
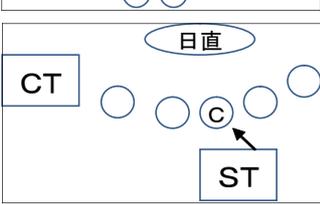
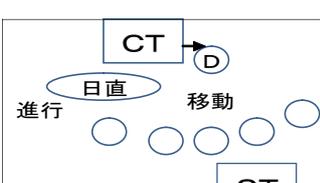
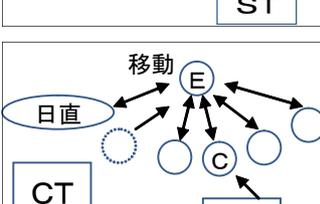
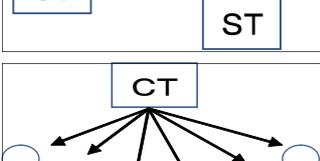
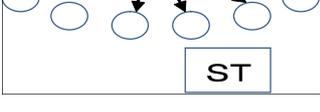
児童生徒と教師の氏名をそれぞれ記入したマグネットを活用することで、動線を確認することができる。そのため、CT、STのそれぞれの役割や、児童生徒が活動しやすいスペースや動線が確保されているかを確認する際に、有効に活用することができる。

5 授業分析を通して改善を行った授業の展開例

A校では、以上のような授業分析を通して、次のように「朝の会」の改善を行った。

- (1) 実践場面 「日常生活の指導」（朝の会の実際部分を抜粋）
- (2) 学部・学年 小学部3年生 男子4人、女子2人 計6人
- (3) 指導者 CT, STの2人
- (4) 主な改善点
 - ・ 学習指導案（略案）に、児童や教師の動きを入れた図を加えた。
 - ・ それぞれの児童が活動できる役割や担当を設定することで、参加や活動量が増えるように工夫した。
 - ・ CTが前に出る機会を必要最小限にし、全体を掌握できる位置に立ち、児童の活動状況を確認できるようにした。

STは、全体的にCTをサポートする場面と、個別の指導・支援が必要な児童に対応できるようにした。
- (5) 実 際 ※ ゴシック体の部分が改善点

主な学習活動	指導上の留意点	児童や教師の動き
1 はじめのあいさつをする。 ・ 日直の児童が進行カードを使って進行し、担当のA児が号令を掛ける。	・ CTは、日直の児童に進行カードを渡す。 一人での進行が難しい場合は、横に立ち支援する。STは、個別のスケジュールカードを使用する児童を支援する。	
2 朝の歌を歌う。 ・ 用意された3曲の中から担当のB児が選ぶ。 ・ B児は、歌詞カードを黒板に貼る。	・ CTは、B児が歌詞カードを貼る活動を支援する。 ・ STは、CTの顔写真をB児に渡し、CTのいる場所へ移動を促す。B児が歌詞カードの準備を終えたら、電子ピアノを演奏する。	
3 朝のあいさつをする。 ・ 担当のC児がVOCA（音声出力型コミュニケーションエイド）のスイッチを押して、あいさつの合図を出す。	・ STは、音声での表出言語が難しいC児のために、VOCAを準備し、C児がスイッチを押しやすいように提示する。 ・ 日直は、前に立ちあいさつをする。	
4 日付・天気を発表する。 ・ 担当のD児がカレンダーに〇印を付けて、日付を発表する。 ・ 天気カードを使って、天気を発表する。	・ CTは、D児がカレンダーに印が付けやすいように、黒板に掲示する。 ・ CTは、天気カードをD児に示す。 ・ D児が発表する場所が分かるように、足下に印を付けておく。	
5 健康観察をする。 ・ 担当のE児が、健康観察チェック表を見ながら、一人ずつ確認する。	・ CTは、一人につき一枚の写真付き健康観察チェック表をE児に渡す。 ・ STは、VOCAを準備して、C児がスイッチを押しやすいように提示する。 ・ CT, STともに連絡帳等での情報を基に、補足して、E児が正しくチェックできるようにする。	
6 今日の予定を発表する。 ・ 小黒板の予定表をCTが説明し、今日の学習内容と場所、時刻を確認する。	・ CTは、小黒板を見やすい位置に置き、文字や写真カード(絵カード)を使いながら、今日の予定を確認する。 ・ CTは、時計の絵と開始時刻のマッチングを行う。	
7 終わりのあいさつをする。 ・ 日直の児童が進行カードを使って進行し、担当のA児が号令を掛ける。	・ CTは、日直の進行に賞賛を行う。 ・ 全員が拍手等で賞賛を行うように、CT, STともに支援を行う。	

6 成果と課題

児童生徒が主体的に参加することができるような授業改善を行ったことで、次のような成果や課題が見られた。

(1) 成果

- ・ VTRを活用した授業分析を行い、学習指導案の中に児童生徒や教師の動きを明記することで、授業の目標や学習内容を共通理解することができ、指導・支援の方法を共有することができた。
- ・ 児童生徒が参加する活動を増やしたことで、これまで以上に自信をもって活動に取り組んだり、自分から活動しようとしたりする姿が見られるようになった。
- ・ 教師間の経験に影響されず、CTとSTの役割分担が明確になり、個に応じた指導・支援が充実した。
- ・ 放課後の10分間のミーティングで、評価と改善策について話し合うことができ、次時への指導・支援に役立った。
- ・ 教師の共通理解により、教材・教具を一緒に作成したり、分担したりすることができ、負担が減った。

(2) 課題

- ・ 毎回の学習指導案の中に児童生徒や教師の動きを明記することは、時間的に負担もある。
- ・ ワークショップ型の授業分析は、慣れるまでは時間が掛かるため、時間的に余裕があるときに実施した方がよい。
- ・ 学部全体での授業などのように、大集団での授業については、放課後の10分間のミーティングでは対応が難しい。

7 まとめ

A校での実践に基づき、児童生徒が主体的に活動する授業づくりについて整理した

結果、以下の点についてよさが見られた。

(1) 学習環境の工夫

実践例のように、活動する場所が分かりやすかったり、毎日繰り返し行われたり、活動する際の手掛かりやきっかけを用意したりすることで、児童生徒は「こうすればいいんだ」、「やってみよう」という活動への見通しをもつことができ、主体的に活動することが期待される。

(2) 個に応じた支援ツールの工夫

一人一人の児童生徒の実態に応じた支援ツールを工夫することで、参加の機会が増える。実践例では、言語表出が難しい児童にVOCAを準備することで、発表の機会を確保することができている。

(3) ティーム・ティーチングの工夫

ミーティング等の活用を図り、立ち位置や役割分担、個別の指導・支援についての具体的な手立てについて共通理解を図り、改善を行うことが大切である。実践例では、CTは、中心となって授業を進める役割から、児童生徒の活動を支援しながら全体を指導する役割に変わっている。また、STも、よりきめ細かな補助的な指導・支援を行えるようになっている。

本稿においては、みんなが参加できるような授業への改善という視点から、児童生徒が主体的に活動できる授業の工夫について述べてきた。各学校においても、実践を振り返り、アイデアを出し合いながら授業を改善することで、児童生徒の主体的な活動が、より一層充実するよう努めてほしい。

－参考文献－

- 富山大学人間発達科学部附属特別支援学校授業作りのコツ(試案2010年度版)
- 鹿児島大学教育学部附属特別支援学校研究紀要第18集、平成23年
(特別支援教育研修課)